opusdei.org

属人区長の書簡 (2011年5月)

ハビエル・エチェバリーア司教の書簡は、5月を始めるにあたっての三つの喜びに触れます。すなわち、復活節の祝い、ヨハネ・パウロ二世の列福、聖母月の開始です。

2011/05/09

愛する皆さん、イエスが私の娘たち と息子たちをお守りくださいますよ うに! Surrexit Dominus vere et apparuit Simoni.[i] 本当に主は復活して、シ モンに現れた。まだ教会の喜びがこ だましていますが、それはいつまで も続くはずです。使徒たちは、超自 然的で人間的な喜びに満ちたこの言 葉で、キリスト教最初の復活の日の 夜遅く、エルサレムの最後の晩さん の高間で、エマオから大急ぎで引き 返してきた二人の弟子を迎えます。 クレオパとその仲間は、村に帰る途 上で生きているイエスがご出現にな り、その上、一緒に食事の席におつ きになったことを伝えました。

主なる師の屈辱的な死に立ち会った あの人たちの驚きがよく理解できま す。また、朝早く空になった主の 傍らで、「恐れることはない。 行って、私の兄弟たちにガリラヤへ 行くように言いなさい。そこで私に 会うことになる」[ii]と尋常ならざる 知らせを受けた聖なる婦人たちを、 彼らがなぜ信じなかったのかも分か

ります。しかしながら、神は何と私 たちのすぐそばにおられるお方なの でしょう。イエス・キリストはガリ ラヤに集結することを待たずに、弟 子たちを慰め、信仰と喜びを取り戻 させようと熱望されたのでした。そ の夜、弟子たちがユダヤ人を恐れて |iii|戸を閉じて集まっていた部屋に 入って来られ、挨拶されました。聖 ルカが述べています。「『あなたが たに平和があるように』と言われ た。彼らは恐れおののき、亡霊を見 ているのだと思った。そこで、イエ スは言われた。『なぜ、うろたえて いるのか。どうして心に疑いを起こ すのか。私の手や足を見なさい。ま さしく私だ。触ってよく見なさい。 亡霊には肉も骨もないが、あなたが たに見えるとおり、私にはそれがあ る。』」[iv] そして、食べ物を所望 されます。本当に、死の鎖を打ち砕 き、悪魔と罪に打ち勝たれた良い先 生である主なのだと納得させるため でした。

復活節の最初の一週間が過ぎました が、教会は、イエスの復活を語る福 音書の場面を、何度も何度も喜びを 持って考察し続けています。主の勝 利への信仰に満ちて、感謝と深い感 動のうちにそうするのです。人類史 上、唯一無二の出来事であると同時 に、世の終わりの普遍的な復活とい う私たちにとっての重要な出来事の 模範なのです。洗礼によって私たち はキリストと一体になり、その死と 復活に与るものになりました。こう して、罪に死に、恩恵の命に復活し た私たちは、完全な命に至ることを 待ちわびながら、新たな人生を歩ん でいるのです。聖パウロがこう述べ ています。「もし、私たちがキリス トと一体になってその死の姿にあや かるならば、その復活の姿にもあや かれるでしょう。| [v]

神の全能と慈しみに対する驚きと敬 意はいやが上にも高まります。キリ ストの復活は、ラザロやヤイロの 娘、ナインの未亡人の息子のよう に、以前の命に戻ったことだけに留 まるものではありません。彼らは主 によって命を取り戻しましたが、こ の世で過ごした後に、再び亡くなり ました。主の復活はそれとは根本的 に異なります。「新約聖書は紛うこ となき明確さで『人の子の復活』が 全く異質の出来事であると証言して います。イエスの復活は、全く新た な命に至るために、それまでの鎖を 断ち切るものでした。この新たな命 とは、誕生と死の法則に縛られたも のではないだけでなく、それを遥か に超えるものです。つまり、新たな 次元の人間として生き始めるので す。それゆえ、イエスの復活は、私 たちが忘れてもかまわない過去の孤 立した出来事ではなく、(…)質的 な飛躍のことです。イエスの復活に よって新たなあり方が可能になりま した。これは全ての人間に関わる事 であり、人類に未来を、しかも新た

な未来を開くこととなったので す。」[vi]

世界の歴史においてキリストの復活 の知らせは、最も素晴らしい〈よい 知らせ〉です。この事実を証しする ため、使徒たちは、恐れを完全に払 拭して各地に散っていきました。殉 教者たちは、あらゆる艱難や自身の 死を果敢に受け入れました。多くの 証聖者やおとめたちは、この世の野 心や安楽を捨て、全力を傾けて永遠 の善を望みました。そして、何世紀 もの間、数知れない信徒たちが、こ の世の事柄に携わり、正しい意向と 神と人々への愛を持って働きながら 天国に目を挙げて生きてきました。

キリストの復活の特異性とは、その 聖なる人性において、改めて霊魂と 肉体が一つになり、聖霊の働きに よって父なる神の栄光を完全に受け られたという点です。同時にそれ は、弟子たちへの御出現を記してい

る箇所からはっきりと分かるよう に、真の人間であることを放棄され たのではありません。確かにそれは 私たちに経験できないことです。こ の歴史的事実は、全面的に信じ得る 目撃者の証言に基づいていますが、 同時に、超自然的信仰の根本的な対 象になっています。聖アウグスチヌ スが確言しています。「キリストの 死を信じるのは大したことではあり ません (…) 誰もがキリストの死を 信じています。キリスト者の信仰と はキリストの復活を信じることで す。私たちはキリストが復活された ことを信じる偉大な信仰を持ってい るのです。| [vii]

なぜイエスは全ての人が主を信じる ために、ご自分の復活を全ての人に 表されなかったのかと自問すること が、時にあるかもしれません。ベネ ディクト16世はこう指摘されていま す。「命あるすべての歴史におい て、新たなものの始まりはほとんど

見えないほど小さなものです。気付 かれることなく始まります。主自ら 仰せになりました。この世における 〈天の国〉は、あらゆる種のうちで 最も小さなからし種のようです(マ タイ13.31参照)。しかし、そこには 神の無限の能力が秘められていま す。」「viii」そしてこの世に復活が 入ったことをこう結論付けておられ ます。「それは、選ばれた幾人かの 人への幾つかの神秘的なご出現を通 してもたらされたものですが、実際 に新たなことが始まったのです。そ れは、皆が無意識のうちに待ってい たことでした。」[ix]

時が経過するに連れて、主の復活への信仰は世界中に広まり、地上を旅するキリストの神秘体の成員である信者たちの協力のお陰で、新たな文化、様々な文明に根を下ろしました。聖ホセマリアが熱心に繰り返したように、今度はあなたと私が、そして全てのキリスト者が、行いと言

葉でキリストを証しする番なので す。

「復活という新しい良い知らせは、 熱心で勇気を持った証人を求めま す。私たち一人ひとりも含めて、全 てのキリストの弟子が証人となるよ う招かれています。これはまさに、 復活した主ご自身が命じた、果たす べき、心動かされる務めです。キリ ストにおけるこの新しい命について の〈知らせ〉を、キリスト信者の生 活の中に輝かさなければなりませ ん。この〈知らせ〉をもたらす人の 内で生き生きと脈打っていなければ なりません。そして、この〈知ら せ〉こそが、人の心と存在全体とを 造り変えることができるのです。| [x] 主の勝利を固く信じ、たくまし い信仰を保つよう日々努めています か。キリストが本当に復活されたと 信じることが、私たちの歩みを確実 にしてくれているでしょうか。地上 での歩みのあらゆる岐路において、

いつも私たちの傍らにおられる主を 見出すためどのように戦っています か。

「復活祭は喜びの季節であります。 しかもその喜びは、復活祭の間だけ でなく、常に信者の心にある喜びな のです。なぜならキリストは、美し い思い出と素晴らしい模範を残して 行ってしまった過去の人物ではな く、今も生きる御方であるからで す。

生きておられるキリスト。イエスは私たちと共にいて下さる神、インマヌエルなのです。神はご自分の民をお見捨てにならないことが、キリストの復活によって明らかになりました。」[xi]

イエス・キリストは御父の栄光のうちにおいでになるだけでなく、教会の中に、特にご聖体において、また 恩恵によって個々のキリスト信者の 心の中に現存されます。洗礼によっ

て私たちは、主が全面的に有してお られる新しい命を受け取り、その他 の秘跡がこの超自然的な命を次第に 完成していきます。神秘体のメン バーである私たちは、体の復活に よってのみ、私たちの頭であるイエ スと、私たちの母でもあるその御母 が享受しておられる十全な栄光に完 全に与ることができるのです。しか しながら、創立者はこう述べていま す。「信仰によれば、人は恩恵の状 態にあるとき、『神化』されている と言われます。私たちは人間であっ て、天使ではありません。心を持 ち、情念に燃え、悲しみや喜びを感 じる生身の人間です。しかし神化 は、光栄ある復活に先駆けるかのよ うに、人間全体に影響を与えるので す。| [xii] 願わくは、イエス・キリ ストにおいて、聖霊によって、父な る神の子であることに、常に感謝す ることができますように。

こうして最終的な栄光に前もって与 ることは、聖なる人たち、特に教会 が諸徳の模範とし、尊敬するよう私 たちに示す聖人たちの足跡において ひと際輝いています。当然なことで すが、私たちはこれらの兄弟姉妹た ちが最終的な勝利を勝ち得たことを 喜んでいます。この喜びは、今日、 5月1日、愛するヨハネ・パウロ二世 の列福式によって、一層際立ちま す。あなたたちのほとんどが列福式 に参加するためローマに来ることは できないでしょうが、私たち皆が全 教会のこの大きな喜びに霊的に固く 一致していることを感じているで しょう。

私たちは、死の間際まで人々のため ご自分を捧げ尽くされた、この偉大 な教皇様に出会いました。私たち は、その深い信仰と揺るがない希 望、そして全ての人を一人ひとりも み込む熱烈な愛徳の証人となりまし た。さらに、オプス・デイにおいて

は、これまで度々あなたたちに思い 起こしてもらったように、この新福 者に感謝すべき大きな義務がありま す。何よりも、ヨハネ・パウロ二世 は、オプス・デイに最終的な法形態 を与えるため、また聖ホセマリアを 列聖するため、主の道具となられた からです。私たちがその列福を喜 び、教会にもたらされたこの恵みを 神に感謝するのは、ごく当たり前の ことです。私自身、3日に感謝の荘 厳ミサを捧げます。この日は、それ が可能であるならばより一層熱心 に、私のミサに一致し、新福者の取 次ぎを通して主に願う私の全ての意 向のために祈ってください。

その上、5月が始まります。教会は、これからの数週間、特別に聖マリアを褒め称えるように勧めます。 創立者とヨハネ・パウロ二世の取り次ぎを求めることを皆さんに提案します。前教皇の列福式で始まるこれからの日々に、神の御母を力の限り

愛し、崇めるための恩恵を頂くこと ができるよう二人に願いましょう。 カロル・ヴォイティワは、教皇紋章 にモットーとしてTotus Tuusと書き 込まれたことからも分かるように、 非常に若い時から、聖母に全存在を 献げておられました。聖ホセマリア もまた、天の元后の全面的に忠実な 僕になることを望んでおられまし た。1931年12月28日、幼子殉教者の 祝日に、聖イサベル援護会の修道会 のある習慣を解説して、こうしたた めました。「聖母よ、冗談でも、あ なたが全被造物の所有者であり女王 であることを放棄されるよう望んだ りはしません。| [xiii]

私たちもまた、全面的に主の者であり、またそうなるように望んでいるのですから、聖ホセマリアが遺産として残したこの聖母信心の小道を辿らなければなりません。「何か倣って欲しいことが私にあるとしたら、それは聖母への愛です」[xiv]と言っ

ておられました。今月は、伝統的な 5月の「巡礼」を通して、聖母信心 を深める素晴らしい機会がありま す。友人や知人を誘って聖母の小聖 堂や巡礼地を訪れ、ロザリオの諸神 秘を黙想しつつ祈りましょう。その 人たちに霊的に大きな善をもたらす ことになります。「キリストへの道 は常にマリアを通る。そして、キリ ストに『戻る』道もマリアを通るし [xv]からです。創立者がソンソーレ スに赴いた信心を持って、巡礼に赴 いてください。さらに、後年、メキ シコのグァダルーペの聖母への九日 間の祈り(ノベナ)で勧められたよう に、多くの小さなバラ、つまり日々 の出来事を聖母にお献げしましょ う。

5月14日、ミサの福音書から〈善き牧者の日〉とも呼ばれる復活節第四主日の前晩、あなたたちの兄弟である35人の助祭に司祭叙階の秘跡を授けます。いつものように今回も、皆

が固く一致して、新司祭と世界中の全司祭のために祈りと犠牲を捧げるようにお願いします。祈る際には特に、ご自分の羊のために命を捧げてくださった「善き牧者」[xvi]に私たちが倣うよう、教皇様と全ての司教様方を心に留めてください。

聖週間が終わってから、スロベニア とクロアチアを駆け巡ってきまし た。リュブリャナとザグレブでは、 属人区の信者とオプス・デイの精神 に助けられている多くの人たちとの 集いを持ちました。創立者が熱心に 祈っておられたこの二つの国で、私 の子どもたちの使徒職がしっかりと 根を下ろしているのを目にして、神 に感謝しています。創立者が世界中 の国を、中でも様々な困難に遭遇し ている国々をどれほど愛しておられ たかを、十分に言い表すのは難しい ことです。

この手紙の冒頭に戻ります。 Surrexit Dominus vere! 本当に主は 復活された。「復活したキリスト は、新しい天と新しい地を目指して (黙示録21.1参照)、私たちに先 立って歩みます。この新しい天と新 しい地では、私たちは皆、ついには 同じ父の子として、一つの家族とし て生きるのです。キリストは世の終 わりまで私たちと共にいてくださる のです。| [xvii] 主は、パンとぶど う酒の外観の下に、秘跡的にご聖体 としてお残りになりました。それ は、私たちの願いを聴き、私たちを 慰め、私たちを強めてくださるため です。主から離れることのないよう にし、多くの人々を主の元に連れて いきましょう。その人たちにも、キ リストと共にいることの喜び、キリ ストに同伴し、キリストにおいて生 きることの喜びを体験させるためで す。脱線するのをお許しください。 ドン・アルバロはどれほど深い感謝 のうちにご自分の初聖体のことを思

い起こしておられたことでしょう。 オプス・デイの歴史にまつわる思い 出深い日がたくさんありますが、それらを取り上げることができません。聖マリアがいかに私たちを見 守ってくださったかがはっきりと分 かります。聖母に感謝しましょう。

心からの愛情を込めて祝福を送りま す。

皆さんのパドレ

†ハビエル

ローマ、2011年5月1日

[i] ルカ 24,34.

[ii] マタイ 28,10.

[iii] ヨハネ20,19参照

[iv] ルカ 24,36-39.

 $[v] \square - \neg 6,5.$

[vi] ヨセフ・ラッツィンガー・ベネディクト16世、『ナザレのイエス』 II, p.284. (邦訳未刊)

[vii] 聖アウグスチヌス、『詩編講解』120,6 (CCL40,1791)

[viii] ヨセフ・ラッツィンガー・ベネ ディクト16世、『ナザレのイエス』 II, p.288.(邦訳未刊)

[ix] 同上

[x] ヨセフ・ラッツィンガー・ベネディクト16世、『ナザレのイエス』II, p.284. (邦訳未刊)

[xi] 聖ホセマリア、『知識の香』102番。

[xii] 同上103番。

[xiii] 聖ホセマリア、『内的覚書 (1931年12月28日)』517番 (A.Vazquez de Prada著『オプス・ デイの創立者』I, 413ページ参照) [xiv] 聖ホセマリア、1954年。

[xv] 聖ホセマリア、『道』495番。

[xvi] ヨハネ10, 1-18参照

[xvii] ベネディクト16世、2011年4月 24日復活祭メッセージ

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/shuren-qu-chang-noshujian-2011nian-5yue/ (2025/12/15)